

○海又1号墳について

◀大原廃寺出土軒平瓦の文様部分

かいまた

海又1号墳について

鳥取大学地域学部地域学科 教授 高田 健一

はじめに

海又1号墳は、倉吉市米田町字海又に所在する前方後円墳である(図1)。一般県道倉吉環状線建設計画に伴って、2003年に計画地内の試掘調査が行なわれた際に発見された(森下他 2003)。

谷を挟んで向かいの丘陵上には、米田古墳群と呼ばれる10基ほどの古墳群が存在し、一体的に理解すべき古墳群と考えられる。このうち中期後半の円墳・東山田1号墳が調査されており(国田 1987)、古墳群の築造時期の一端を知ることができる。

この古墳については、新鳥取県史編さん事業の一環で2018年に航空レーザーによる3次元測量が行なわれた。縮尺400分1の墳丘図が『新鳥取県史資料編・考古2・古墳時代』に収録されているが、図のみで古墳に関する記載がない。小稿では、測量図を補うべく、現状で判明する海又1号墳に関する情報

を整理しておきたい。今後の調査・研究に資するところがあれば幸いである。

墳丘の現状

古墳は、前方部を南西に向ける前方後円墳である。標高60m(比高差40m)ほどの丘陵頂部に位置し、全長約52m、後円部径約30m、前方部長は約22mを測る。くびれ部幅は約14mで、前方部前端幅は約20mと考えられる(図2)。後円部の高さは、西側面から見ると約3mであるが、丘陵先端の北側から観察すると比高差5mほどとなり、非常にボリューム感がある。平野部からの見栄えを意識した築造方法と考えられる。一方、前方部の高さは最も高い場所でも2mほどであり、低平な印象を受ける。前方部の形状は直線的に伸び、あまり開かない。

2003年の試掘調査では、前方部に1箇所(T12)、

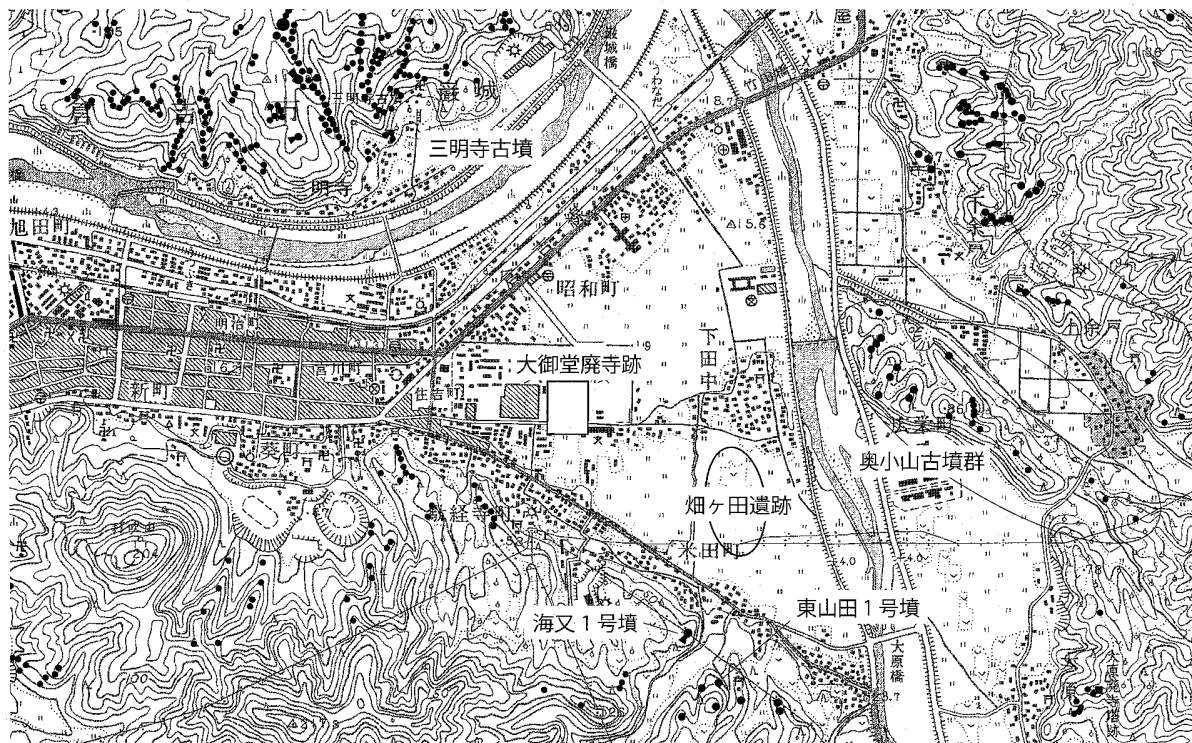


図1 海又1号墳の位置

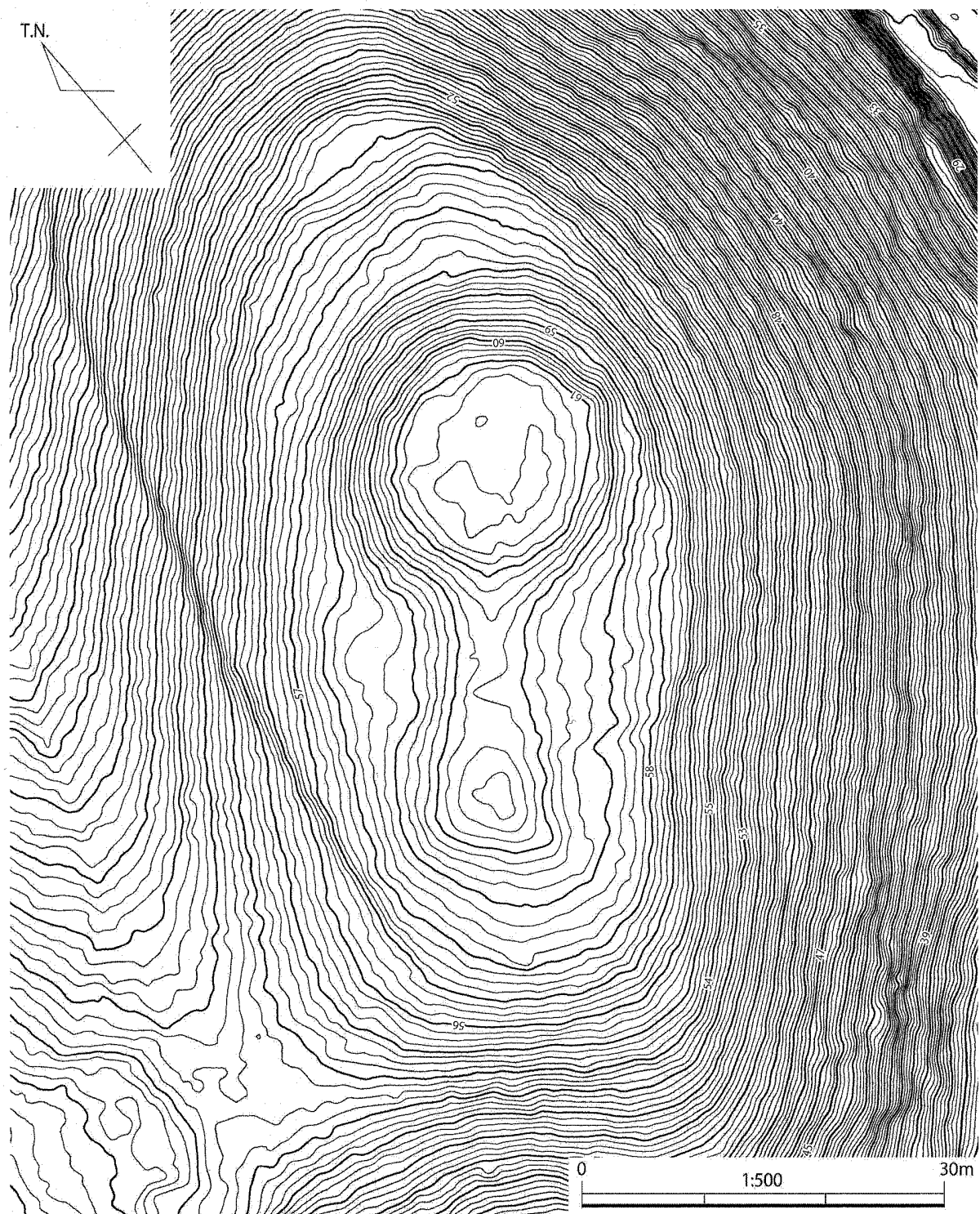
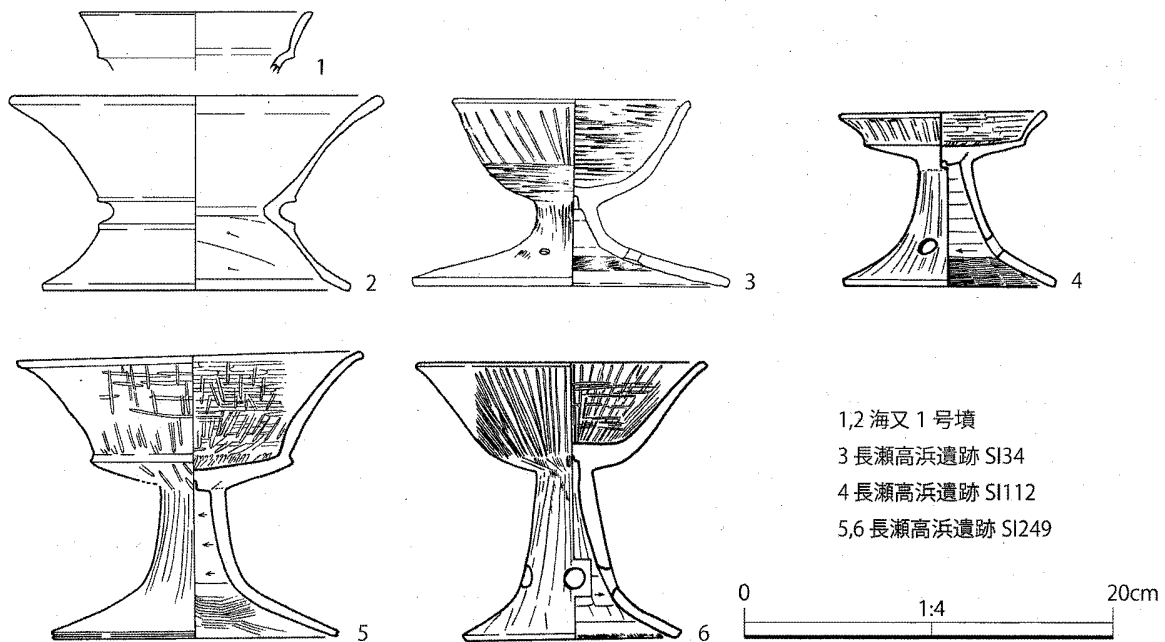


図2 海又1号墳実測図

後円部の西側に2箇所 (T15、T16) のトレンチが設定されたようで、墳丘面の確認が行なわれ、墳丘斜面部で多数の礫が出土したことから葺石が存在すると報告された。現地を見ると、墳丘の各所に人頭大の角礫～垂角礫が存在し、葺石の存在は明確と思われる。ただし、前方部平坦面上に列をなして集中する部分があるなど、古墳本来の姿かどうか疑わし

い点がある。土地の境界などに再利用されている可能性も考慮すべきであろう。また、段築が施された可能性はあるが、現状ではよくわからない。

後円部平坦面は、やや窪んでいるため、攪乱を被っている可能性が考えられるが、石材などの散乱は認められず、埋葬施設的具体像を推測させるような手がかりはない。



1,2 海又1号墳
3 長瀬高浜遺跡 SI34
4 長瀬高浜遺跡 SI112
5,6 長瀬高浜遺跡 SI249

図3 海又1号墳出土土器と参考資料

出土遺物

墳丘上や周辺から、土師器や須恵器が出土しているが、円筒埴輪、形象埴輪は存在しないようである。小稿をなすにあたり、2003年の試掘調査で出土した遺物を見学し、古墳の時期について参考にすべき知見を得たので報告する。

まず、後円部に設けられたT15トレンチからは、墳頂平坦面から須恵器坏蓋片などが出土している。いずれも数片の破片で、全容を窺いうるものではないが、調整の特徴からある程度時期を推測できる。坏蓋は、天井部のごく狭い範囲のみを削っており、古墳時代後期末段階（TK209型式期）と考えられよう。また、広口壺と考えられる胴部片の外面にはカキメが施されており、高坏脚部片も同様である。このような特徴からみると、古墳時代後期後半～末段階（TK43～TK209型式期）のものと考えられる。

これらの須恵器が古墳の築造時期を示すものと考えれば、海又1号墳は、向山6号墳や上神48号墳などと同様な時期の古墳となり、倉吉地域で最後に近い前方後円墳で、かつ最大級ということになる。しかし、低平で幅狭い前方部形態は、後期古墳に一般的な姿とはみなしがたい。

一方、墳丘裾部に設けられたT16トレンチからは、古墳時代前期の土師器群が出土している。器表面が摩滅・剥落しているものや、口縁や脚端部が欠損しているものが多いため、実測できた土器は小型の甕ないし壺の複合口縁部片1点、鼓形器台1点に止ま

るものの（図3）、複数の器種が存在する。

甕ないし壺の複合口縁部片は少なくとも2点あり、いずれも口縁端部に若干の面をもつと考えられる。図3-1は、口径12.6cmを測る。外面は風化して調整が見えないものの、内面は丁寧な横ミガキが施されている。

鼓形器台は、1点がほぼ完形に復元できるものである。図3-2は、口径20.2cm、高さ10.3cm、底径16.4cmを測る。筒状部の径は9.0cmで、底部高は3.6cmである。口縁部や底部の端面は丸く収め、外方への拡張が少ない。筒状部の稜は鋭く、明瞭である。外面は丁寧な横ミガキが施されているものの、単位は明瞭でない。受部内面はミガキ、脚部内面は斜め方向のケズリが施されているが、やはり調整の単位はよく見えない。受部の内面下半部はゆるく内湾する。

上記以外には、高坏の脚部片があり、数個体分存在する他、器壁が薄い球形の胴部片も存在し、小型丸底土器などの存在も予想できる。高坏は、少なくとも3種類の存在が考えられる。坏部形態は十分に明らかでないが、脚部片の形態や大きさも加味して考えると、天神川編年（牧本1999）による器種分類の高坏D類（図3-3）、F類（図3-5）、C類（図3-6）が存在すると考えられる。また、脚部底径が10cmほどの破片もあるので、小型高坏形器台（図3-4）も含まれているかもしれない。

鼓形器台のプロポーシオンは、古相を呈するよう

にも思われるが、天神川編年では、高坏C類やF類が揃うのは天神川Ⅲ期からであり、鼓形器台や高坏の小型化や伝統的な形態からの逸脱が始まる段階であるから、古相を示す形態が一定量残存していることも考えられよう。全体の様相としては、天神川Ⅲ期までに収まる可能性が高いと思われる。

土器の残存状況や組合せから見ると、須恵器よりも土師器の方が古墳に伴う遺物として相応しいと考えられる。したがって、海又1号墳は、古墳時代前期の前方後円墳である可能性が高いと言えよう。

海又1号墳の性格と今後の課題

海又1号墳が前期の前方後円墳だとすると、どのようなことが考えられるだろうか。

まず、気になるのは、倉吉地域で前期の盟主墳と考えられてきた伯耆国分寺古墳との関係である。この古墳は、近年の出土品の再評価の結果、中国四国前方後円墳研究会の編年（以下、中四研編年）のⅣ期（前期後半古段階）に属すると考えられた（岩本2019）。天神川Ⅲ期は、小谷3式新段階と並行すると見られ（松山2018）、中四研編年Ⅳ期に相当するので、海又1号墳は伯耆国分寺古墳と同じ段階に置かれることとなる。伯耆国分寺古墳は、全長60mの前方後円墳とみる意見が主流であるが、これに劣る規模とはいえ、50mを超える前方後円墳という点をどう評価すべきだろうか。

一方、馬ノ山4号墳や宮内狐塚古墳との関係はどうか。近年、これらの墳丘上で採取された埴輪や土師器によると（東方他2017）、馬ノ山4号墳は中四研編年のⅤ期に降る一方、宮内狐塚古墳はそれ以前のⅣ期になる可能性が高い。そうすると、全長95mで葺石、^{せっかく}堅穴式石槨、円筒埴輪など畿内的な古墳の諸要素を備えた宮内狐塚古墳とも同時代となる。

また、向山古墳群宮ノ峰支群との関係も見逃せない（眞田1990、名越1996）。墳形は方墳（19号墳）や円墳（21号墳）であるが、^{わりなげがた}堅穴式石槨や割竹形木棺を採用するという点で、伯耆国分寺古墳など旧社村地域の有力な古墳系列も備えていない要素をもつ、倉吉地域で一定の勢力を保つ古墳群と言える。

このような状況の中で、東伯耆第4の勢力として海又1号墳の存在を考えることになる。葺石を備えた前方後円墳という点で、宮内狐塚古墳に近いが、規模では伯耆国分寺古墳に及ばない。分立する諸勢力の中の微妙な立場を表しているようにも見える。

海又1号墳を築造した人々の生活基盤はどこにあるだろうか。考えるのは、北側の上灘平野である。ここには畑ヶ田遺跡が知られており、弥生時代終末期の包含層が確認されている（森下他1999）。自然堤防上の下田中地区も含めて、注意が必要だろう。

古墳出現の地理的背景としては、周辺が天神川流域の交通の結節点となる地域であることにも注意が必要である。下流側では、長瀬高浜遺跡や馬ノ山古墳群などとの関係を考慮できるし、上流側では、人形峠を越えて津山盆地に至るルートも視野に入れる必要がある。このルート上では、竹田墳墓群や田邑丸山古墳群など、山陰系土器をもつ古墳群が存在する点が興味深い。

おわりに

海又1号墳のより深い理解のためには、さらなる調査・研究が必要である。まずは、既往の出土遺物をもう少し詳細に検討する必要があるが、将来的には保存を見据えた追加の発掘調査が望ましいだろう。関係各位のご配慮をお願いしたい。

謝辞

小稿を草する機会を与えられた眞田廣幸氏、出土遺物と現地調査にご配慮いただいた小田芳弘氏、片岡啓介氏、種々ご教示いただいた加藤誠司氏に感謝申し上げます。

【参考文献】

- 岩本崇他2019『伯耆国分寺古墳の研究』鳥根大学法文学部考古学研究室・伯耆国分寺古墳研究会
- 国田修二郎1987『東山田1号墳発掘調査報告書』倉吉市教育委員会
- 眞田廣幸1990「前期方墳群の調査—倉吉市向山古墳群宮ノ峰支群—」『季刊考古学』第31号、雄山閣、pp. 83-84
- 名越勉1996「前方後円墳の時代」『新編倉吉市史』第1巻古代編、倉吉市、pp. 161-186
- 東方仁史・君嶋俊行・岩垣命・中原齊2017「東郷池周辺大型前方後円墳の埴輪」『調査研究紀要』8、鳥取県埋蔵文化財センター、pp. 71-86
- 牧本哲雄1999「古墳時代の土器について」『長瀬高浜遺跡8・園第6遺跡』鳥取県教育文化財団、pp. 151-160
- 松山智弘2018「山陰」『前期古墳編年を再考する』六一書房、pp. 161-174
- 森下哲哉他1999『倉吉市内遺跡分布調査報告書X』倉吉市教育委員会
- 森下哲哉他2003『倉吉市内遺跡分布調査報告書12』倉吉市教育委員会